

## 会議記録

名 称	学校教育環境整備等検討委員会〔第2回〕	
開催年月日・開催場所	平成23年7月22日（木） 午後1時30分～午後3時00分 南丹市役所 2号棟 301会議室	
出席者名	委 員	(出席委員) 山口 満、原 清治、内藤 喜代子、高木 茂、松本 貞和 川勝 規弘、末武 千鶴子、堀川 勝久、片山 敏哉 佐藤 明美、平井 隆（オブザーバー）
	事務局及び 庁内PT委員	(事務局) 森教育長、大野教育次長、前田教育総務課長、西田学校教育課長、 市原社会教育課長、坂瀬総括指導主事、山口教育総務課長補佐、 寺田教育総務課長補佐、山田研究主事 (庁内PT委員等) 学校教育課（小南指導主事、下田指導主事）
傍聴人	なし	
配布資料	資料1 「南丹市教育の在り方懇話会 第1回会議録」 資料2 「学校教育環境整備等検討委員会 第1回会議録」 資料3 市校長会・教頭会・教務主任会からの提言（答申）資料 資料4 市立小学校における学級規模別学級数の推移（グラフ）	
議事の概要	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 開会宣言</li> <li>2 教育長挨拶</li> <li>3 報告 <ul style="list-style-type: none"> <li>・南丹市教育の在り方懇話会第1回会議の概要報告</li> </ul> </li> <li>4 協議 <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 第1回会議の概要報告〔報告：事務局〕</li> <li>(2) 豊かな学びと育ちを促す人的環境としての「集団」の在り方について</li> </ul> </li> <li>5 その他 <ul style="list-style-type: none"> <li>・事務局からの報告事項 第3回検討委員会の開催日時の確認</li> </ul> </li> <li>6 閉会挨拶</li> </ol>	
会議の経過	別紙のとおり	

## ■教育長あいさつ■

ご多用の中、本検討委員会第2回目の会議にご出席賜り、お礼を申し上げます。

前回の第1回会議では、本市における急速な少子化が進行するという実情・実態を踏まえていただき、今後益々、子ども達一人一人の存在が相対的に大きくなっていくことから、より豊かで確かな学びと育ちを実現していくがより重要になってきていること。また、そのためには、本市合併以前から、中学校ブロック毎に取組まれてきました保幼小中の連携した取組を一層強化するとともに、交流活動を中心とした多様な活動を推進していく必要があるといったことについてご論議いただいた。

本日は、この少子化の波をまともに受けている小学校の学校現場の現実について、とりわけ、1クラスあたりの児童数に着目いただき、未来社会の担い手となる子どもたちの大切な学びの場である学級での児童数（「学級規模」）が何人程度であれば学び合いが深まり、子ども達ひとりひとりの豊かな育ちに繋がって行くのかということなどを中心としてご論議いただければありがたい。

なおこの点に関わりましては、昨年度において、本市の小学校長会、小学校教頭会、小学校教務主任会にそれぞれの職に応じたテーマで研究検討を依頼し、一定のまとめをいただいております。それらも後ほど報告願いながら、参考にさせていただき、委員に皆様の豊かな経験とご識見のもとにご論議を深めていただければありがたい。本市のこれからの小学校教育の在り様に向けて、本日のテーマを中心に検討を深めていただくようお願いする。

## ■事務局報告

「南丹市の教育の在り方懇話会 第1回会議」概要について

## ■意見交換・協議 [○：委員発言 →：事務局発言]

=委員長により第1回会議録についての承認が諮られ、全員承認を確認の後、続いて、論議の進め方について提案後、意見交換に入る=

## 議題：豊かな学びと育ちを促す人的環境としての「集団」の在り方について

### 【課題整理と課題へのアプローチ方法について】

- 少子化の進行に伴う学校教育上の課題は、小規模校と地域社会とのつながりの強さという側面も見ることができるが、それよりも、子どもの豊かな育ちを軸に考えた場合に、適切な学習集団規模というものを考えることこそ重要である。
- 課題を焦点化してみると、以前は「小規模」といっても、その小規模の良さを生かせるような学校現状であったものが、現在は、小規模すぎるということにきているということである。

また（小規模）すぎることによりさまざまな弊害が出てきているということであり、今後、子ども達の豊かな育ちを十分に実現していくことができない状況に入っていくの

ではないかということが、現在、教育的にクローズアップされてきているということである。このことを再確認し、今後の議論につなげる必要があると思う。

- 保護者の意見・思い、地域の考え・思いも踏まえる必要がある課題ではあるが、まずは子どもの育ちを中心に検討していく必要のある課題である。
- 「集団」と「子どもの豊かな育ち」を考える上では、集団の規模について、具体的な数値で議論することも大切ではないかと考える。
- （小集団のメリット・デメリットに関して）保護者の中には「少人数であるがゆえにきめ細かく見てもらえることができる」という意見がある反面、大きな集団になじみにくいという意見があることも事実である。このことは、小学校段階だけでなく、集団という概念を基礎とする保育所・幼稚園でも言えることである。
- 少子化が進む中にあるのは、市全体を大きく見通した校区の再編制も視野に入れて考えてみる必要があるのではないかと考える。また、幼少期における集団はある程度大きな集団であることが必要であるかと考える。

#### 〔豊かな学びと育ちを促す「学習集団」の規模について〕

- 「子ども達が思う存分に力を発揮できる」「先生も力を存分に発揮できる」状況にあることが学校力に繋がると考える。この学校力が発揮される状況を作ることで、子ども達の豊かな育ちに繋がっていくものかと考える。
- 少子化が進行する中で、小集団化していく現実がある。小学校長会としては学級規模（学習集団）は1学級あたり20人から30人の規模が必要であると考えている。保護者の中には小規模校に対する違和感を持っている保護者もあることは確かである。小集団にはメリット・デメリットの両面があるが、この件に関しては、あくまでも教育の立場から子どもの育ちを中心にして検討していくべきであるかと考える。

また、学校教職員の規模があるかと考えることも、より教育効果を得るための学校組織を考える上でも大変重要なことだと考える。

併せて、同学年の学級が複数（2学級～3学級）あることが学校の規模を考える上では最良であると思うが、本市の現状から厳しいと思われるので、この点に関しては、学校間連携により対応できると考えている。

- 豊かな育ちという視点から意見を述べると、以前、小規模の学級を見学した際にさみしさを感じた。また、複式学級の授業を見学した際にも、一人の子どもの育ちを考えるときに、多くの仲間とともに学び合い育ち合い、集団の中で嬉々としている姿に教育の原点を求めべきではないかと考える。

複式学級においても、粘り強さが付いていくということもあると思うが、やはり、集団の中で集団規律を学びながら自主性・自立性を伸ばしていくことが豊かな育ちという面からも必要なことではないか。

- 今後の数年間を見通していく中で、児童数が年々減少していくことが予想される中で、様々な視点からの意見が出されているとおり、市教頭会としても1学級少なくとも20

名規模の集団が必要であると感じている。特に小学校は6年間という期間であることから、切磋琢磨される状況にあることが必要である。少子化による児童数の減少という状況に対し、将来的な見通しと何らかの方策が必要であると感じる。また、このことは、教職員数とも関連するものであり、校内での役割分担について無理なく機能するためには、最低12名の教職員が確保できる学校規模が必要であると考ええる。

- 生徒指導面では、小規模であるがゆえに、組織的な体制での対処がしにくい点があるのではないかと感じる。
- 子どもの発達の観点からグループ・ダイナミズムを小さい時から与える必要があると考える。
- 小規模集団の中では、自我を通してしまうということがあるが、中学生になって、少し大きな集団に入ると、このようなことは解消したということがあった。これは、考える力の育ちや集団の力というものの中での変化でないかと感じる。
- 通学距離等の様々な地域性や環境条件があると思うが、これにも増して、適切な規模の学習集団の中で育ちと学びを促していくことが大切である。
- 学級サイズ・学校サイズ・教職員人数の問題であるが、(様々な研究を通じた教育学上)一般的には、教師が子ども達をきめ細かく見て指導ができ、豊かな学び合いができる学級サイズは20名程度だと言われている。経験値からしても、15名～20名は必要であり、最大で30名程度であると考ええる。

#### ※検討に供した資料等

##### 資料3 市校長会・教頭会・教務主任会からの提言〔概要：下記〕

[市校長会からの答申内容概要報告(抜粋)]

「たくましく生きる力を育む学校教育環境の在り方について」

- ・児童減少に伴い、小規模校では教員が校務分掌を複数兼ねており、円滑な学校運営に少なからず影響が生じている。この点から、学校運営上、適正な教職員の人材配置やたくましく生きる力を育む教育を推進していくための教師力が最も発揮できる学校組織は教職員数12名～16名程度であると考ええる。
- ・安全で安心して学べる学校として、耐震化診断に基づく施設改修も含め、四季を通して快適な学びが可能となる環境の整備充実が必要であると考ええる。
- ・学校が組織的に子どもの教育にあたることのできる体制の確保には、1学年20名～30名、全校で概ね120名～180名程度は必要であると考ええる。

[市教頭会からの答申内容概要報告（抜粋）]

「たくましく生きる力を育む学校組織の在り方について」

- ・たくましく生きる力を育むために、児童の実態を的確に把握し目標の明確化を図ることが肝要である。この際、児童の実態把握にあたっては、学習面や生活面、友達関係等の多方面からの把握が必要であるため、1学級1担任の体制が不可欠である。
- ・子どもたちに生きる力を育むための様々な効果的な教育活動を行なうための理想とする教職員組織の構成は、校長・教頭・専任教務・生徒指導主任・学級担任・養護教諭・事務職員・管理用務等で組織され、学習指導部、生徒指導部、健康安全部等の専門部会が組織できる総教職員 20 名程度の規模と考える。

[市教務主任会からの答申内容概要報告（抜粋）]

「たくましく生きる力を育む教育課程と授業の在り方について」

・確かな学力を獲得するための授業の在り方として、児童が学びたいくなるような教材の提示や、学びを深めるために思考・判断・表現の時間を計画的に取り入れて多様な意見の中から自分の考えを構築させることが望まれる。

・きめ細かく、かつ様々な教育活動が実現できる学級規模により、一人一人のたくましく生きる力を育てる教育活動が可能となると考えられ、ここから、「1学級 20 名程度」「(可能ならば) 複数学級」が望ましいと判断できる。

1学級の中の班活動で4人ずつの班が5グループ程度編成されることで学級の諸活動が活性化する。また、体育のボール運動時のチームの成立や音楽の合奏・合唱における豊かな響き合いが実践できることから判断できる。

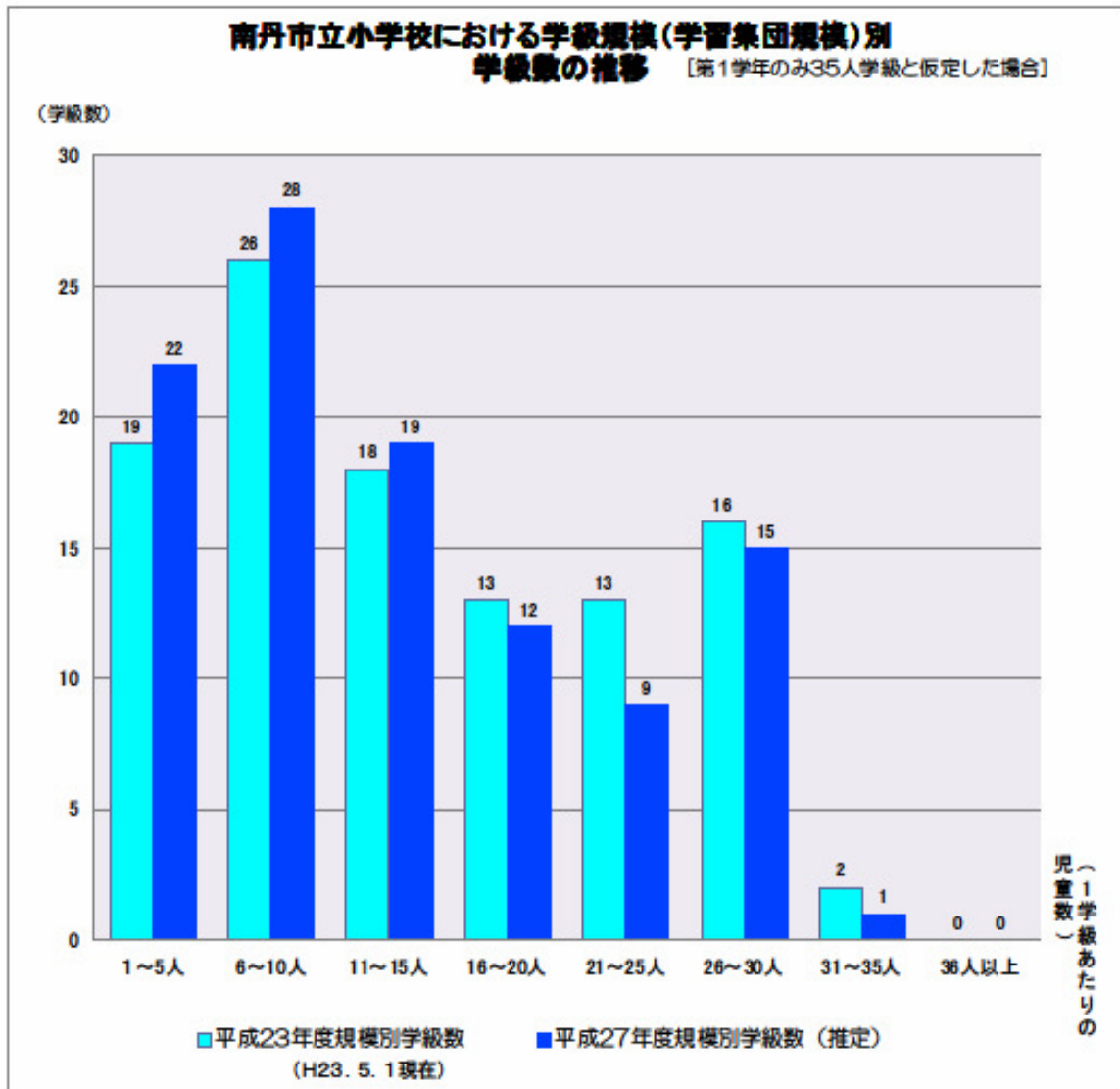
**資料4** 市立小学校における学級規模別学級数の推移〔別添〕

◇◆まとめとして◆◇

**【望ましい学習集団の在り方について】**

- 全国的に学力低下の問題が言われているが、一昔前には、複式学級のように小さな学級が持っている教育的効果を論じる時に、ある一定の小ささが学習の値を促進するという指摘があった。しかし、最近の学力調査の結果を見ると、学級規模が小さいと競争意識が起きてこずに、馴れ合いの環境になることによって、ネガティブな学力低下の側面が指摘されてきている。南丹市の子どもたちの将来の学びや育ちを考えた時、お互いに切磋琢磨できるだけの一定の規模が必要である。

したがって、各学校が所在する地域での歴史的な背景や経緯があると思うが、子ども達の豊かな育ちに焦点を当てて、集団の規模を考えた場合、教育学的に相応しい集団の規模は今回の議論や本会議の資料中に提示されているとおり、少なくとも 20 名程度の学習集団規模が必要であると考えられる。



[規模別学級数]	1～5人	6～10人	11～15人	16～20人	21～25人	26～30人	31～35人	36人以上	計
平成23年度規模別学級数	19	26	18	13	13	16	2	0	107
(内、複式学級数)	(3)	(5)	(3)						(11)
平成27年度規模別学級数(推定)	22	28	19	12	9	15	1	0	106
(内、複式学級数)	(3)	(7)	(3)						(13)

平成23年度の現状と平成27年度推定との比較から、16人～20人規模の学級を境に、15人までの学級が増加し、21人以上の学級が減少していく傾向にあることが言える。

\* 特別支援学級数は含んでいない。(特別支援学級在籍児童は、原学級に含めている。)